
はらへった金魚

明子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はらへった金魚

【Nコード】

N6027C

【作者名】

明子

【あらすじ】

夜店で売られていた金魚の金次郎と銀次郎。ある一家にやってきたことからはじまる冒険コメディ物語。

おいらは、祭りで売られている赤い和金魚だい。

ある日、ママに連れられてやってきた男の子がおいらをすくった。

「これからどこいくんだろー」

ドキドキしていると、

「さあ、これで金魚が家にやってくるわね、ゆうちゃん」

ママがとてもうれしそう。

おいらは、黒いでめきんと、おんなじ種類の一匹と、小さな赤い金魚と一緒にプラスチックのすいそうに入れられた。

「はあい、ごはんでちゅよー」

ママは金魚が好きらしい……。よかったよかったこれで大切に育てられるな。

しかし、仲間の黒いでめきんが、苦しそう……。

「ごはんがつまっておなかが苦しいよう」

今度は、小さな赤い和金が、

「ぼくも……」

二ひきは、ごはんの食べすぎて、あっけなくお空に飛んでいったしまった……。

その日からだった。

「今日は、これだけね、食べすぎるとしんじやうみたいだから、がまんしてね」

ママからのごはんはたったの五つぶ。

おいらと、のこった同じ和金は、はらがへってへってもうふらふら……。おやつがわりの「も草」も食べつくし、頭がおかしくなりそ

うだ……。

目の前では、ママと、パパとゆうちゃんがおいしそうにごはんをぱくぱく食べているではないですか……。

「暗くなったら食べるにいこうぜい」

おいらは仲間をさそつた。

「ええつ、どうやっていくんですかい」

「おいらにまかせとけて」

みんなが寝静まり、暗くなった。

おいらは、ふわふわと水から出ると、すいそこのふたをそつと開けた。

「こいつ、今だぞ」

仲間の金魚をまず外に出すと、おいらもほいつと出た。

台所には、ゆうちゃんが食べ残したらしいごはんがすててあつた。

おいらたちは何もいわずにかぶりついた。

「まんまんまん」

ふくれあがつたおなかをかかえひと息ついたときだった。

「んがつ、ぐるじい・・・これがふんづまりかあ」

ちようど目の前のごみ箱に細長いつまようじが落ちていた。

おしりをつつくのにちようどいい。

「お願いだよ、おいらのふんを出すの手伝っておくれよ・・・」

「ほいきた、次はぼくのをお願いするよ」

こうして黒いくて丸い大きなふんが二つ台所に並んだ。

「しょせん和金魚、されど和金。ふんづまりさえしなけりやなんと

かなるとはこのことだあ。おいら金次郎、よろしくな」

「ぼくは銀次郎、お尻合いになつたのも何かのごえん。よろしくね」

おいらたちはすっかり気をゆるす仲となり、水槽にもどりゆつくり休んだのだった。もちろん大切なつまようじは、水槽の下にかくしておいて。

「ギヤーツ」

ママの甲高い声で目がさめた。

「ゆうちゃん、あんただねー」

金魚のすいそうから台所にかけて水がぼたぼたとこぼれおちていて、台所には金魚の大きなふんが二つ仲良く並んでいた。

「ママひどい！ぼくじゃないよ。ほら、この金魚きのうよりすごく大きくなっているよ」

ママは、すいそうをのぞいてから、首をかしげた。

「おかしいわねー。昨日までこんなに大きかったかしら？ まさかまさか。そんなことあるわけないわよつ。ゆうちゃん金魚のせいにするんじゃないのー！」

がつつーんと、ママのげんこつがとんだ。

「いってー、ママのばかー」

おいらたちは、こっそり話あった。

「ゆうちゃんがかわいそうだな。こんどは外に食べにいこうぜ」

「そうしよつ」

おいらたちは、みんながねしずまると、そつとすいそうからぬけだした。

ちようど通り抜けられそうな郵便受けを見つけて、ひよいと、外へと飛び出した！

「なんと、すばらしい世界だあー」

とおいら。

「外の空気はおいしいなあ」

銀次郎がうれしそうにいった。

「空気の味のわかる金魚なんぞ聞いたことねえなあ。あつはっはっ
おいらたちははらをかかえて笑っていた。

夜空にはかぞえきれないたくさんの星がちかちかしていた。

ずっと向こうの町もたくさん光でちかちかしていた。

「あっちにいつてみようぜ、きつとごちそうがたんまりあるさ」

「金次郎、あまり遠くまでいくと干上がってしまふよ」

「だいじょうぶ！ おいらにまかせておけって」

庭に長い木の板と大きな石があったので、おいらはシーソーを作った。

「銀次郎、さあさあのった！のった！」

いやがる銀次郎をシーソーにのせて、おいらもひよいつと飛びのると、シーソーのはしに大きな石をどすんと落としました。

「ロケット発射だあああ！」

おいらはとくいげにさけんだ。

銀次郎は、風がびゅんびゅん顔に当たるものだから、こわくなってふるえていた。

「銀次郎、大丈夫だって」

おいらが銀次郎の手をぎつちりにぎると銀次郎もだいぶ落ち着いてきたようだった。

「金次郎さん、星がとてもきれいですね。うっうっうっ」

「そうだなあ、おいらたちも赤い流れ星ぜー、びゅーん！」

おいらたちは胸いっぱいになって、空を飛んだ。

どっすーん！

「あででで」

「いだいですー」

おいらはおしりをさすりながら、きよろきよろあたりをみわたした。

「まるでおひるのようですね」

銀次郎は目をぱちくりしていた。

「そうだなあ、ここの町はみんなが起きてらー」

すぐそばに青いポリバケツがあつた。

たくさんのおいしく食べ物がふたのあいだから顔をだしていた。

「うわー、なんじゃこりゃ」

「まだ温かいですよ。親切な町ですね。たくさんのおいしく食べ物をごみに入れておいてくれるなんて」

「そうだなー、みんないい人がたくさんいるんだ。えんりよなくいただごうぜ」

「いったただきまーす」

おいらたちは、きちんとそういつてから、ありがたく食べさせてもらつた。

「まんまんまん」

「まんまんまん」

「おいしいなあ、ここのごちそうは。ゆうちゃんのママの作るごちそうよりおいしいなあ」

「そうですね、きっとおいらたちのために特別にじゅんびしてくださつたんですね」

おいらたちはあまりのおいしさに顔もほころびにやにやしながら食べていた。

とんとん。だれかがおいらの肩をたたいた。

「きんぎょさんの服なんて着て、あんたおもしろいかつごうおもいつきましたねー、はっはっはっ」

おいらは口にエビフライをくわえたまま、ふりかえると、メガネのよっぱらいの男が立っていた。

「おやー！」

おいらがとつさにさけぶと、
むこうも、

「ぎゃー！ 本物のきんぎよだあ・・・でっかいきんぎよがごみく
つてらぞー」

と大きな声でさけんだのだった。

おいらは、銀次郎をよくみてみると、その男とそんなにかわらない
大きさになっていた。

おいらはどうなつてんだ・・・。

銀次郎がおいらを指さして

「お、大きくなつてますよー」

とふるえる声でいった。

まわりにはメガネの男の声を聞いた人たちがどんどん集まってきた
ではないですか。

「こりゃ、大きな金魚だなあ。ごみをくうなんてなあ」
とざわざわうわさしていた。

「この人たち、親切な人たちではなさそうですね」

「おつかしいなー。おいらたちの食べ物でなかったのかな」

おいらは首をかしげた。

すると、今度はおながぎゆるぎゆるいいだした。

「いつけねえ、ふんだしするの忘れてた。つまようじもってきたか、

銀次郎ー」

「ああっ、わすれてきましたー。どこにかわりのものないですか
ね」

おいらはじりじり近寄ってくる赤ら顔の男たちから、いまずぐ逃げ
たくて、つまようじさがしよりも、

とつさにゴミのふたでシーソーづくりを思いついた。

「さあ、逃げよう、銀次郎！ なんだか知らないけど、ここはおい

らたちのいるところではないようだぜ」

おいらたちは空飛ぶごみのふたシーソーで肉のかたまりを落としてびよーんと飛んだ。

「さようならー、よっぱらいさんたち」

たくさんの人だかりがどんどん小さくなっていった。

でも体が大きくなりすぎて、思うように飛ぶことができない。よろよろよ。

今にも落ちそうになった。

「思いつきり空気をすうと体が軽くなりますよ」

「さすが銀次郎、いいこと言ってくれるなあ」

おいらたちはなんとかゆうちゃんの家の上まで飛び続けた。

ふんづまりで、ますますふくれあがるおなかをかかえて、

おいらたちは、ふわふわとゆうちゃんの家の前におりたった。

「わたしたち、まるでふうせんになったみたいですねー、ぽんぽんはずみますよ」

「ふうせんっていうより、銀次郎のかっこうふうみりたいだぜ」

「金次郎こそ、ふぐそのものですよ」

二人はおなかの痛いのも忘れて、はみながら、ドアの前に立った。

「あれっ、ドアが開いてますね、どうしたんでしょう。まだ朝までだいぶありますよ」

「おっかしいなー。でも大きくなったおいらたちにとっちゃ、ここしか入れるところないからちよっどいいな」

「ガチャッ、ガラガラガラ」

真っ暗な中の方から音がした。

「おいつ、なんか変だぜ」

「そうですねー、だれかいるみたいですよ」
おいらたちは、開いているドアからそうっと入っていった。

二つの小さな光があちこちをてらして、ぐるぐるまわっていた。

「いったい、だれが何しているんでしょうね」

銀次郎は、金次郎にぴたりとみをよせた。

「銀次郎、そうっとつまようじ持ってきてくれないかい。おなかいたくてあるけないよ」

「いいですよ」

銀次郎は、大きなおながじゃまでなかなか暗い部屋の中を歩くことができません。

ごろっ、どっすーん。

銀次郎がつまぶくと、銀次郎が二つの小さな光にてらされた・・・。

「金魚ばけものだあ」

黄色のニット帽を深くかぶった男がさげんだ。

「金次郎さん、見つかってしまいましたー」

銀次郎はおろおろしていると、

「おーい。こつちだぞ」

と金次郎が声をだした。

すると今度は、金次郎が二つの光にてらされた。

「こつちにも金魚ばけものがいたぞー」

赤いニット帽の男がさげんだ。

「さあ、今のうちだ銀次郎」

おいらがいうと、銀次郎は大きい体をよいしょと、すいそうの方にのばすと、すいそうをどかして、つまようじをつかんだ。

「金次郎さん、はいっ」

銀次郎が金次郎の方につまようじをなげると、金次郎はそれをつかむとすぐにおしりにいれてみた。

「あれれっ、体が大きくなりすぎて、つまようじがふんまでとどかないよ」

そうするうちに、二人の男たちが金次郎をつかまえようと、囲んでしまった。

銀次郎は、つまようじよりも長いものをさがした。

その時だった。二階からゆうちゃんが、目をこすりながら台所におりてきた。

「のどかわいたなー」

ゆうちゃんは、光にてらされて、目をぱちくりさせていた。

二人の男たちが金次郎からはなれると、

「ぼっちゃん、家の人にはないしょだよ」

といいながら、ゆうちゃんにちかづいていったではないですか。

「銀次郎、ゆうちゃんを助けて」

とおいらはさげんだ。

銀次郎はすぐ近くに立っていたゆうちゃんに手をのばすと、自分の後にかくまった。

「ゆうちゃん、長いぼうがほしいんだけど」

銀次郎は、ゆうちゃんに早口でいった。

「うわっ、おっきな金魚だなあ、初めてみるやあ」

銀次郎の大きな赤いうろこをさわった。

「はやくっ、ゆうちゃん」

「わりばしなんてどうかなあ」

ゆうちゃんはわりばしを銀次郎の手にわたした。

銀次郎は長さを確かめると、うなずいて、金次郎にぽーんと投げた。

「ほいきたっ」

おいらはわりばしをうけとると、銀次郎にいった。

「おいらは、赤いニツトぼっしの方にするぜ。銀次郎は黄色いニツ

トぼっしの方をたのんだぜ」

銀次郎はゆうちゃんからもう一本わりばしをもらつと、

「まかせてくださいー」

とさげんだ。

「金魚のばけものこれから何する気だ？」
と黄色のニットぼうし。

「きつとおれたち変な夢でも見てるんだ。こんなおつきな金魚がいるわけがない。さあ、つかまえよう」
と赤いニットぼうし。

黄色の方は、銀次郎、赤い方は、金次郎をつかまえようと手に持っていたバットをふりながらむかってきた。

「さあ、今だぜ！」

「いいですよ、金次郎さん」

おいらたちはわりばしをおしりにいれると、

「ジュツバーツ」

ものすごい量のふんがいつせいにおしりからふきだした。

銀次郎は黄色い方においらは赤い方に……。

二人の男たちはおいらたちのふんの中にうもれてしまった。

「すごいねー、金魚さんたち。どろぼうをつかまえちゃったよ」

ゆうちゃんがおいらたちにそんけいの目を向けた時、

おいらたちは、ふんが出ていくにしたがって、ずんずん小さく縮こまっていった。

「うわ、金魚さん、ちっちゃくなっちゃった」

「ゆうちゃん、無事でよかった、よかった」

おいらたちは小さくなっていく体で、ゆうちゃんに聞こえる最後の声で語りかけた。

「もうげんかいだぜ。うろこがからからだ。いそいで、すいそうの中に入るう」

「ふんを出したらなんとかすいそうに入るぐらいにもどってよかったですね」

おいらたちは、ひょいっ、ぽちゃんっ。すいそうの中にもどってい

た。

朝、目をさますと、ゆうちゃんと、ゆうちゃんのパパとママ、それにけいさつの人がいた。

黄色と赤のニットぼうしの男たちは、けいさつの人にホースで水をかけられて、ふんをおとされると、てじょうをかけられてつれていかれた。

「このうちにはきんぎよのばけものがいるですよ。気をつけた方がいいですよ」

と二人の男たちがゆうちゃんのパパとママに言い残していつてしまった。

パパとママはあきれた顔で、おいらたちの方を見た。

「この金魚たちが、ばけもののわけがないわねっ、パパ」

「そうだな、きつとゆめでもみてたんだろう。まったくおかしなどるぼつだな。はっはっはっはっ」

「ちがうよ、パパ、ママ。本当だよ。この金魚たちがどろぼうをやっつけたんだよ」

ゆうちゃんがひっしになってパパとママに見たことを説明した。

「ゆうちゃんまで何いってるの。ねぼけたこといってないで、さっさと顔あらってらっしゃい」

ママがゆうちゃんをごつんとたたいた。

「ゆうちゃんがかわいそうだな」

「そうですね。今度は、ゆうちゃんをはげましにいきましょうか」

「それがいい。そうしようぜ」

おいらたちは、こっそり話あった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6027c/>

はらへった金魚

2010年10月21日21時42分発行